

Shinshuhonbyo-higashihongan-ji Temple 真宗本廟東本願寺

阿弥陀堂門ほか2棟

京都市下京区

阿弥陀堂門 | 明治 44 年 (1911)

鐘楼 | 明治 27 年 (1894)

手水屋形 | 明治 28 年 (1895)

事業期間：令和 3 年 9 月～令和 7 年 3 月（予定）

真宗本廟東本願寺は、真宗大谷派の
本山寺院で、烏丸通に東面して境内を
構えます。文永 9 年（1272）に親
鸞聖人の娘覚信尼が東山大谷の地に廟
堂を建立したことに始まり、鎌倉時代
末期頃には本願寺を称します。慶長 7
年（1602）、徳川家康が寄進した
現在地に東本願寺が分立し、境内が整
備されました。以後、4 度の火災に見
舞われ、その都度門徒の支援により復
興を遂げます。現在の伽藍は元治元年
（1864）の大火後、明治期を中心
に整えられ、比類ない規模と高い格式
を備えた近代の寺院建築群として価値
を有すことから、大正期の内事を含め
23 棟が重要文化財になっています。

鐘楼

重文

《修理完了》

鐘楼は、明治 27 年（1894）の竣
工で、棟梁は伊藤平左衛門守道です。
御影堂・阿弥陀堂の復興と同時に境内
南東寄りに建立されました。禅宗様を
基調とし、桁行一間、梁間一間、南北
棟の入母屋造、檜皮葺、高く積まれた
亀甲積基壇上に建っています。基壇南
面に石段と引違格子戸の腕木門が東面
して付属します。同様の構造形式のな
かでは大規模な建造物です。内部は対
角の大斗に鐘釣梁を交差して渡す独特
の架構で、交点に鐘を吊っています。
鐘の直下は土間に六角形の穴を穿ち、
甕を据える特徴も有します。鐘釣梁の
地紋彫、四面の欄間や妻飾、隅尾垂木
など各所に施された彫刻は繊細で、随
所に鋳金具を用いています。

修理の内容

屋根葺替と部分修理を目的として着
手し、令和 6 年 9 月に完了しました。
檜皮葺は昭和 55 年（1980）以来の
葺替となり、経年劣化から全体的に鉄
板養生を施している状態でした。鬼瓦
桐紋の金箔押し、切断されていた素棟
木等の細かい納まりを復旧し、破損部

阿弥陀堂門

重文

《修理完了》

阿弥陀堂門は、三上吉兵衛を棟梁と
して明治 44 年（1911）に建立され
ました。桁行 6・1メートル、梁間 5
メートルで四脚門としては大規模なも
のとなり、境内南東に位置し東を正面
とします。禅宗様を基調とし、前後唐
破風付の切妻屋根を檜皮で葺きます。
各所に精緻な彫刻を施し、鋳金具も随
所に用いられ、細部意匠に富んだ堂々
たる構えの門です。伝統的な技術に加
え、要所にボルトやネジを使用してい
る点は明治期の特徴の一つです。

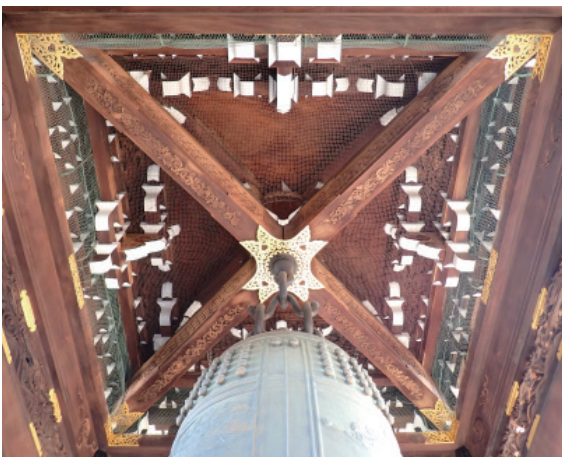
修理の内容

屋根葺替と部分修理を目的として着
手し、令和 4 年 10 月に完了しました。
檜皮葺は昭和 55 年（1980）以来の
葺替となり、耐用年数を超えた経年劣
化、雨漏りも各所で起こっていました。
前回、変更された細かい納まりを
復旧し、破損部分の補修を経て檜皮を
葺き上げました。鋳金具は建立後初め
ての補修となり、表面の仕上げが不明
なほど緑青錆が付着している状態でし
たが、丁寧に洗いをかけ金箔押し等で
仕上げました。

分の補修を経て檜皮を葺き上げまし
た。鋳金具は建立後初めての補修で、
痕跡及び調査結果に基づき表面の仕上
げを行いました。



鐘楼 屋根全景



鐘楼 内部見上げ

手水屋形

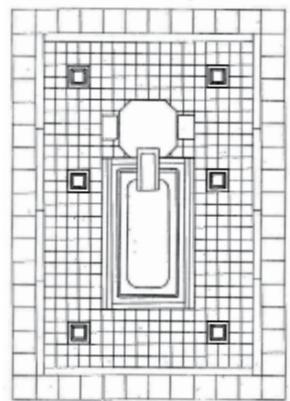
重文

《修理中》

手水屋形は、棟札によれば明治 28 年
（1895）の竣工で、御影堂・阿弥
陀堂の間、手前側に位置します。桁行
二間、梁間一間、東西棟の入母屋造で
本瓦葺です。東の柱間を広くとり水盤
を据え、西の柱間に井戸を設けて一体
化し、周囲の土間全体に石畳を敷いて
納めています。水盤と井戸は石製で、
高精度な加工が見られます。

修理の内容

屋根葺替と部分修理を実施中です。
屋根の本瓦葺は、建立後初めて全面的
な葺替となります。経年劣化が著し
い上、割れやずれで雨漏りが起こり、
小屋裏や化粧の木部まで腐朽破損が見
られました。軒の垂下も目視で確認で
きるほどで、今回の修理により建物全
体を健全な状態に戻し、併せて耐震補
強も行います。



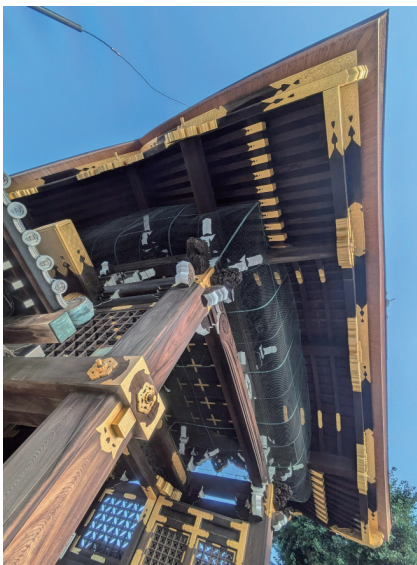
手水屋形 平面図



手水屋形 井戸と水盤



手水屋形 修理前 全景



阿弥陀堂門 竣工 見上げ



阿弥陀堂門 木鼻



阿弥陀堂門 竣工 東面全景